

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 5 月 16 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K04162

研究課題名(和文) 南方離島民の戦時・戦後経験の比較歴史社会学的研究：強制疎開と動員、帰還と離散

研究課題名(英文) A Comparative Socio-Historical Study on the Wartime and Postwar Experiences of the People of the Japanese Southern Islands: Forced Evacuation or Military Mobilization, Return to Homeland or Diaspora

研究代表者

石原 俊 (Ishihara, Shun)

明治学院大学・社会学部・教授

研究者番号：00419251

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトでは、小笠原群島・硫黄列島・大東諸島など日本の南方離島のくびとが、アジア太平洋戦争から戦後初期にかけて強いられた、疎開や軍務動員、帰還や離散・故郷喪失をめぐる諸経験に関して、比較歴史社会学的研究を実施した。

コロナ禍で離島現地調査が2年近くにわたって不可能になるなど、プロジェクトは大きな制約を強いられたが、感染状況をにらみつつ集中的な調査活動を実施した。

その結果、単著『硫黄島 国策に翻弄された130年』、共編著『シリーズ 戦争と社会』全5巻(岩波書店)、論文「島嶼戦と住民政策 日本帝国の総力戦と疎開・動員・援護の展開」(『思想』1177号)など、重要な成果を公表できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本プロジェクトは、日本帝国がアジア太平洋戦争の敗北局面で南方離島において展開した疎開・軍務動員政策(島嶼戦住民政策)が、どのような法的・戦略的背景をもって形成され、実行され、拡大していったのか、その歴史的・空間的系譜を調査分析した。また、結果として南方離島民たちが敗戦後、いかなる状況に置かれたのかを記述した。

本土決戦を回避した日本本土社会は、しばしば指摘されるように、「日本人」の範囲に限っても、狭義の地上戦(戦場)の経験や復員兵・引揚者・抑留者らの経験を周縁化してきた。だが本プロジェクトが明らかにした南方離島民の状況は、「戦後日本」が総体として切断・忘却しようとしてきた経験なのである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this project is to conduct a comparative socio-historical study on the wartime and postwar experiences of the people of the Japanese southern islands, including the Ogasawara (Bonin) Islands, the Iwo-jima (Volcano) Islands, the Daito Islands.

The Japanese government and the military authority forced these islanders the evacuation to the mainland or the military mobilization during World War II. As a result, after WWII, they were forced to either return to their homelands with difficulty or to disperse to other lands including mainland Japan.

This project was severely constrained by the Covid-19 pandemic. However, by concentrating the research, we can achieve a number of important research results.

研究分野：歴史社会学

キーワード：疎開 動員 離散 島嶼 小笠原 硫黄島 大東 歴史社会学

## 1. 研究開始当初の背景

アジア太平洋戦争末期、日本軍からミクロネシア(南洋群島)を奪取しつつあった米軍は、日本軍が大規模な飛行場を有する硫黄島の奪取を計画し、続いて沖縄諸島への侵攻を計画していた。他方、絶対国防圏を失いつつあった日本軍は、米軍の本土侵攻経路として、フィリピン 台湾(先島諸島・大東諸島) 沖縄諸島 奄美群島ルート、マリアナ諸島 硫黄島 小笠原群島 伊豆諸島ルート、フィリピン 中国大陸 南朝鮮ルートなど、数パターンを予測し始めていた。

日本軍は、島々を戦場または兵站線(後方支援基地)として利用すべく、硫黄列島・小笠原群島・伊豆諸島、そして大東諸島・先島諸島・沖縄諸島・奄美群島など、北西太平洋の広大な領域の住民に対して、疎開または軍務動員 結果としての地上戦への動員を含む を強いていた。日本帝国の総力戦の到達点ともいえる、この体系的で冷酷な軍事政策(島嶼戦住民政策)は、日本の敗戦後も 場合によっては現在まで 島々の社会と住民に多大な影響を与えた。米軍占領や施政権分離、帰郷のための密航、そして島民の長期離散や故郷喪失といった事態が生じたからである。

近年、外地や満州国など日本帝国の勢力圏における引揚や残留に関しては、研究の進展が著しい。だが、法制度上の内地に属する南方離島をめぐる疎開や軍務動員の展開過程は、本土社会の側から閑却され、研究者による体系的な記述さえない状態であった。ここで南方離島とは、沖縄諸島(沖縄島と周辺離島)を除いた、内地に属する本土南方の島々を指す。

沖縄県については、地上戦への住民の動員に関して、長い調査研究の蓄積がある。また、約3万人とされる沖縄島中南部から北部への疎開や、約65,000人とされる本土疎開とりわけ九州への学童疎開に関して、研究が進んでいる。八重山列島から台湾への疎開についても、重厚な調査成果がある。八重山列島に残留した島民がマラリア有病地域に強制疎開させられ、多数が落命した事例については、その凄惨さゆえに、調査研究の層が厚い。一方で石原は、小笠原群島・硫黄列島の島民の強制疎開や軍務動員 硫黄島の場合は地上戦への動員を含む について調査研究を進めてきた。

沖縄諸島について突出した研究の蓄積があるのは、地上戦被害の甚大さゆえであり、その意義は否定されるべきでない。一方で本プロジェクトは、沖縄諸島を中心とする視座からは距離をとり、南方離島の疎開・動員の諸経験を、その軍事政策的背景、相互連関、歴史的影響を視野に入れながら明らかにすることを目指した。

## 2. 研究の目的

本プロジェクトの目的は、日本帝国の総力戦の敗北局面において、北西太平洋規模の軍務動員・疎開そして疎開者救護・援護にかかわる住民政策(島嶼戦住民政策)が、どのような法的あるいは戦略的背景をもって形成され、実行され、拡大していったのか、その歴史的・空間的な系譜を明らかにすることにある。島嶼先住民政策が生成・展開した北西太平洋の島々には、南洋群島(旧・国際連盟C委任統治領)、沖縄諸島(沖縄島と周辺離島)、南方離島(硫黄列島・小笠原群島・伊豆諸島・大東諸島・先島諸島・奄美群島など)が含まれる。この作業を通して本プロジェクトは、本土決戦を経験しなかった日本の国家と社会が総力戦の敗北の過程で結果的に踏み台にした領域にアプローチするさいの、基礎的視座を提供する。

加えて本プロジェクトでは、北西太平洋の広大な領域を統治していた日本帝国が「戦時」に作

り出した島嶼戦住民政策が、「戦後」にどのように連続性をもっているのかについても分析を行う。軍事的前線として使用された結果、北西太平洋の大半の島々は日本の降伏後、米国の直接占領下に置かれ、「戦後」においても、間接占領・主権回復を経ていく日本本土によって、事実上の踏み台として扱われたからである。

### 3. 研究の方法

- (1) 南方離島現地および関係各地でインタビュー調査と文献資料調査を実施した。主たる調査項目は、アジア太平洋戦争期における疎開と一部島民の軍務動員の経験、敗戦後における島民の帰島にいたるまでの過程、各地に残留・離散した島民の経験である。
- (2) 国立国会図書館・東京都公文書館・東京都立中央図書館などにおいて、硫黄列島・小笠原群島・伊豆諸島の強制疎開・軍務動員と帰還・離散に関する資料を閲覧・収集した。また、沖縄本島の琉球大学附属図書館沖縄資料室、沖縄県立図書館郷土資料室、沖縄県公文書館などにおいて、大東諸島および先島諸島の疎開・軍務動員に関する資料を閲覧・収集した。並行して、本プロジェクトが対象とする各離島自治体が編纂した市町村誌／史を渉猟した。

### 4. 研究成果

#### (1) 2017～2018年度

小笠原群島・硫黄列島を重点的な対象として、戦時強制疎開後、70年以上にわたって本土に在住している島民1世を対象としたインタビュー調査を実施するとともに、関係文献資料の収集も行った。また、奄美群島から戦時疎開後、米軍占領期に帰還を選択せず、そのまま本土在住を選択した旧島民の状況について、主に鹿児島市内の島民コミュニティを対象とするインタビュー調査を実施した。

本プロジェクトの中間成果として、『硫黄島 国策に翻弄された130年』（中公新書）を刊行することができた。同書は学界のみならず社会でも話題となり、主要全国紙の大部分および共同通信配信の各地方紙に書評が掲載され、『朝日新聞』の「天声人語」でも研究成果が言及された。

また、2018年6月が小笠原諸島施政権返還50周年にあたることから、東京都主催の小笠原諸島返還50周年記念シンポジウムにおける基調講演者としての登壇、小笠原諸島返還50周年記念誌『原色 小笠原の魂』の総合監修、小笠原諸島返還50年に関するマスコミ各社（TBSラジオ、TOKYO-FM、朝日新聞、毎日新聞、琉球新報、聖教新聞、日本ドットコムなど）への寄稿・出演などが相次いだ。

#### (2) 2019年度

当年度は、前年度末に刊行した『硫黄島』（中公新書）にかかわる講演・研究発表やアウトリーチ活動を幅広く行った。まず、公益財団法人小笠原協会が主催する講演会「国策に翻弄された硫黄島の130年 中公新書『硫黄島』刊行を機に」に登壇し、研究者はもとより、旧島民、一般市民、政治・行政職の聴講者を多く集めた。次に、UCLAで開催された The 6th Annual Trans-

Pacific Workshop にて、前記拙著にかかわる研究発表を実施し、その成果の一環として、拙著の序章の英語訳を『明治学院大学社会学部附属研究所年報』50号に掲載した。そのほか、『毎日新聞』『聖教新聞』『文藝春秋』『潮』などの論壇各誌・紙に小笠原群島・硫黄列島の社会史にかかわる論考を寄稿した。

また、当年度に発足した「全国硫黄島島民3世の会」の研究会を勤務校で不定期開催するなど、島民2・3世当事者からの聞き取りを進めるとともに、かれらが歴史記憶を継承する手助けを行った。

ただし、残念なことが数点あった。ひとつは硫黄列島への島民墓参が行政上の理由により当年度も再開されなかったため、墓参旅行に同行しつつインタビュー調査や参与観察調査を行うことができなかった点である。ふたつは新型コロナウイルスの感染拡大の影響もあり、春季休暇中に予定していた大東諸島などでの現地調査が実施できなかった点である。

### (3) 2020～2021年度

コロナ禍に伴う緊急事態宣言・まん延等防止重点措置、およびそれに準じる離島自治体からの来島自粛要請のために、現地調査の大部分が不可能になってしまった。文献資料収集も、各図書館・文書館・資料館の臨時閉鎖や来館制限のために、大きな制約を強いられた。

2020年度は、勤務先の夏季休暇中に、京都大学の国内研究員（私学研修員）の身分を得て、京大の学内各図書室が所蔵する関連資料を渉猟した。加えて、勤務校である明治学院大学図書館スタッフの多大なる協力を得て、ILLを最大限駆使し、各大学図書館・各公立図書館が所蔵する関連資料を連日取り寄せ、読み続けた。

2021年度は、国立国会図書館、国立公文書館、防衛省防衛研究所史料閲覧室、都立図書館、各大学図書館などが、制限付で開館している時期に、疎開・動員と帰還・離散に関する一次資料調査を重点的に実施した。

また21年度には、勤務先や現地行政関係者の理解を得て、南大東島にて現地調査を行うことができた。文献資料収集や踏査を行ったほか、戦時期に疎開を選択せず南大東島にとどまっていた数名の島民にインタビューを実施することができた。

その結果、共編著『シリーズ 戦争と社会』全5巻（岩波書店、2021～22年）の刊行にこぎつけたほか、本プロジェクトの調査成果の集大成ともいえる論文「島嶼戦と住民政策 日本帝国の総力戦と疎開・動員・援護の展開」（『思想』2022年5月号、岩波書店）を公表することができた。また、アウトリーチ活動の一環として、『朝日新聞』2022年2月8日朝刊の「ひと」欄に、「石原俊さん：硫黄島民の生活史を記録する」が掲載された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計27件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬俊也、佐藤文香、西村 明、野上 元、福間良明	4. 巻 1-5
2. 論文標題 『シリーズ 戦争と社会』刊行にあたって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 シリーズ 戦争と社会 全5巻	6. 最初と最後の頁 v-xii
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石原 俊、蘭 信三	4. 巻 3
2. 論文標題 総説 総力戦・帝国崩壊・占領	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シリーズ 戦争と社会 3巻 総力戦・帝国崩壊・占領	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石原 俊	4. 巻 3
2. 論文標題 総力戦の到達点としての島嶼疎開・軍務動員 南方離島からみた帝国の敗戦・崩壊	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 シリーズ 戦争と社会 3巻 総力戦・帝国崩壊・占領	6. 最初と最後の頁 75-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石原 俊、西村怜馬、羽切朋子、羽切 学	4. 巻 158
2. 論文標題 硫黄島民1世・川島フサ子さんのライフヒストリー 幼少期の生活経験から戦時強制疎開を経て終戦まで	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 明治学院大学社会学・社会福祉学研究	6. 最初と最後の頁 63-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 1177
2. 論文標題 島嶼戦と住民政策 日本帝国の総力戦と疎開・動員・援護の展開	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 思想	6. 最初と最後の頁 104-125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 65
2. 論文標題 国策に翻弄された硫黄島の130年 中公新書『硫黄島』刊行を機に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小笠原	6. 最初と最後の頁 41-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2019年9月号
2. 論文標題 戦後零年の硫黄島	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文藝春秋	6. 最初と最後の頁 80-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2019年9月号
2. 論文標題 硫黄島から見える近現代日本の姿	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 潮	6. 最初と最後の頁 30-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ishihara, Shun	4. 巻 50号
2. 論文標題 Introduction of "The Iwo Jima Islands: 130 Years at the Mercy of the State Policy" (CHUOKORON-SHINSHA, INC., 2019)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 明治学院大学社会学部付属研究所年報	6. 最初と最後の頁 133-137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2020年2月20日
2. 論文標題 硫黄島 戦場の島の知られざる戦後75年	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 政教新聞	6. 最初と最後の頁 7-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2018年6月26日配信
2. 論文標題 小笠原諸島の近現代史 国家に翻弄された移住民の島々	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 NIPPON.COM	6. 最初と最後の頁 ウェブ誌のため頁なし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ishihara, Shun	4. 巻 2018年6月26日配信
2. 論文標題 A Modern History of the Ogasawara Islands: Migration, Diversity, and War	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 NIPPON.COM	6. 最初と最後の頁 ウェブ誌のため頁なし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 100
2. 論文標題 太平洋世界・日本・米国と小笠原諸島 帝国・総力戦・冷戦を生き抜いた島民たち	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 黄海文化	6. 最初と最後の頁 240-270
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 21
2. 論文標題 「群島」からの帝国・総力戦・冷戦の再定位 研究履歴への自己言及と書評への応答	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 クアドランテ	6. 最初と最後の頁 51-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ishihara, Shun	4. 巻 49
2. 論文標題 The Crisis of Academic Freedom and University Autonomy in Contemporary Japan: A Socio-historical Perspective	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究所年報 (明治学院大学社会学部附属研究所)	6. 最初と最後の頁 117-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2018年6月14日
2. 論文標題 返還から50年 小笠原諸島の歩んだ歴史	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 聖教新聞	6. 最初と最後の頁 7-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2018年6月16日朝刊
2. 論文標題 ひもとく「小笠原返還50年 翻弄された「帝国」の最前線」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 朝日新聞	6. 最初と最後の頁 27-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2018年6月26日朝刊
2. 論文標題 月刊・時論フォーラム 2018年6月「小笠原諸島返還50年 なお残る負の遺産」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 毎日新聞	6. 最初と最後の頁 11-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2018年8月15日朝刊
2. 論文標題 論点「硫黄島に残る「戦後」 軍事利用優先させた政府」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 毎日新聞	6. 最初と最後の頁 11-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2018年12月27日
2. 論文標題 小笠原と沖縄：返還50年の先に(4)「石原俊・明治学院大教授に聞く 総力戦、冷戦の「捨て石」に」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 琉球新報	6. 最初と最後の頁 6-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2019年1月25日朝刊
2. 論文標題 月刊・時論フォーラム 2019年1月「FCLP移転 離島に緊張強いる」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 毎日新聞	6. 最初と最後の頁 11-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 154
2. 論文標題 著者インタビュー「石原俊『硫黄島』 忘れられた硫黄列島の歴史的経験と存在を抽出し、日本の近現代を問う」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史群像	6. 最初と最後の頁 122-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2019年3月10日朝刊
2. 論文標題 本と人「『硫黄島』著者 石原俊さん 東京に残る「戦後零年」の島」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 毎日新聞	6. 最初と最後の頁 11-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 2019年3月28日朝刊
2. 論文標題 月刊・時論フォーラム 2019年3月「北方領土交渉 自由往来、漁業権 確立目指せ」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 毎日新聞	6. 最初と最後の頁 11-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 -
2. 論文標題 北硫黄島民の生活史における移動とディアスポラ化 全島強制疎開から<不作為の作為>としての故郷喪失へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 帝国日本の移動と動員(今西 一・飯塚一幸 編、大阪大学出版会)	6. 最初と最後の頁 176-200
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 963号(2017年増刊号:大会特集号)
2. 論文標題 島民からみた硫黄島史 プランテーション社会、強制疎開と軍務動員、そして難民化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 100-110
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石原 俊	4. 巻 -
2. 論文標題 文化ヘゲモニー	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会学理論応用事典(日本社会学会 社会学理論応用事典刊行委員会 編、丸善出版)	6. 最初と最後の頁 576-577
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件(うち招待講演 17件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 硫黄島と近現代日本 島民と戦没者をつなぐ歴史
3. 学会等名 戦後77年目の硫黄島 硫黄島の歴史と帰郷を望む島民の想い(日本戦没者遺骨収集推進協会 主催)(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 「海と島」からみる帝国・冷戦・グローバリゼーション 南方離島研究からの視座
3. 学会等名 長野大学 第114回学内研究会（長野大学地域づくり総合センター 主催）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 小笠原諸島の歴史・文化
3. 学会等名 東京都小笠原村 陸域ガイド講習プログラム（小笠原ホエールウォッチング協会 受託）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 小笠原群島・硫黄列島と北西太平洋世界 群島から問い直す近現代史像
3. 学会等名 東京大学海洋アライアンス沖ノ鳥島・小島嶼国プログラム研究会 「東京都の遠隔離島」（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 国策に翻弄された硫黄島の130年 中公新書『硫黄島』刊行を機に
3. 学会等名 小笠原諸島文化講演会（公益財団法人小笠原協会主催）（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ishihara, Shun
2. 発表標題 Resisting the Loss of Historical Experience: On the publication of "The Iwo Jima Islands (The Volcano Islands)"
3. 学会等名 The 6th Annual Trans-Pacific Workshop, UCLA (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 基調講演「小笠原諸島が歩んできた特異で複雑な歴史」
3. 学会等名 小笠原諸島返還50周年記念シンポジウム(東京都主催)(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ishihara, Shun
2. 発表標題 The "Moratorium" and Freedom of University Students in Contemporary Japan
3. 学会等名 The 5th Trans-Pacific Workshop (University of Washington, Seattle, WA, USA) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 電話解説「フォーカス：小笠原諸島、知っておきたい歴史的経験」
3. 学会等名 TOKYO FM 『TIME LINE』2018年6月26日(パーソナリティ：古谷経衡)(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 コメンテーター「返還50周年特集・第1夜：小笠原諸島、翻弄の歴史」
3. 学会等名 TBSラジオ『荻上チキ・Session-22』2018年6月26日（パーソナリティ：荻上チキ）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 コメンテーター「返還50周年特集・第2夜：小笠原諸島、その豊かな自然の魅力」
3. 学会等名 TBSラジオ『荻上チキ・Session-22』2018年6月27日（パーソナリティ：荻上チキ）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 太平洋世界・日本・米国と小笠原諸島 帝国・総力戦・冷戦を生き抜いた島民たち
3. 学会等名 『黄海文化』100号記念国際シンポジウム（仁荷大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 総力戦・帝国崩壊・占領 南方離島からの視点
3. 学会等名 上智大学公開講座「戦争社会学講座 いま、「戦争と社会」を考える」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 小笠原諸島からみた沖縄と日本 「南」からの近現代史
3. 学会等名 法政大学沖縄文化研究所 総合講座「沖縄を考える」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 コメンテーター「特集・硫黄島：国家に翻弄されたその歴史を知る」
3. 学会等名 TBSラジオ『荻上チキ・Session-22』2019年2月19日(パーソナリティ：荻上チキ)(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 硫黄島民(東京都)の戦争体験とその記憶 強制疎開、地上戦動員、故郷喪失
3. 学会等名 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター シンポジウム「島々とアジア・太平洋戦争 記憶の継承・保存・活用を中心に」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 リプライ
3. 学会等名 科学研究費基盤研究A「批判的地域主義に向けた地域研究のダイアレクティック」：書評コロキウム「群島」という現場 帝国・主権・グローバリゼーション」(東京外国語大学)(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石原 俊、下平尾 直
2. 発表標題 冷戦ガラパゴスをいかに超えるのか
3. 学会等名 『群島と大学 冷戦ガラパゴスを超えて』（共和国）刊行記念対談（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ishihara, Shun
2. 発表標題 The Crisis of Academic Freedom and University Autonomy in Contemporary Japan
3. 学会等名 The 4th Trans-Pacific Workshop (University of California Los Angeles) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石原 俊
2. 発表標題 島民からみた硫黄島史 プランテーション社会、強制疎開と軍務動員、そして難民化
3. 学会等名 歴史学研究会 2017年大会：近代史部会「人々の実践と生活世界の変容」（学習院大学）（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬俊也、佐藤文香、西村 明、野上 元、福間良明 編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 252
3. 書名 シリーズ 戦争と社会 1巻 「戦争と社会」という問い	



1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬俊也、佐藤文香、西村 明、野上 元、福間良明 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 266
3. 書名 シリーズ 戦争と社会 2巻 社会のなかの軍隊、軍隊という社会	

1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬俊也、佐藤文香、西村 明、野上 元、福間良明 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 266
3. 書名 シリーズ 戦争と社会 4巻 言説・表象の磁場	

1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬俊也、佐藤文香、西村 明、野上 元、福間良明 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 278
3. 書名 シリーズ 戦争と社会 3巻 総力戦・帝国崩壊・占領	

1. 著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬俊也、佐藤文香、西村 明、野上 元、福間良明 編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 258
3. 書名 シリーズ 戦争と社会 5巻 変容する記憶と追悼	

1. 著者名 松田素二、松浦雄介、野村明宏、阿部利洋、倉島 哲、坂部晶子、安井大輔、石原 俊、佐々木 祐、宋 基燦、丸山里美	4. 発行年 2021年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 286 (石原担当部分 : pp.171-198)
3. 書名 集会的創造性 コンヴィヴィアルな人間学のために (石原担当章「第7章 戦後日本における島々の集团的創造性 宮本常一とコミュニケーション」)	

1. 著者名 石原 俊	4. 発行年 2019年
2. 出版社 中央公論新社 (中公新書2525)	5. 総ページ数 240
3. 書名 硫黄島 国策に翻弄された130年	

1. 著者名 石原 俊 著 / 金 美晶 訳	4. 発行年 2017年
2. 出版社 グルハンアリ (韓国)	5. 総ページ数 286
3. 書名 『 群島 の歴史社会学 小笠原諸島・硫黄島、日本・アメリカ、そして太平洋世界』韓国語版	

1. 著者名 今西 一、石川亮太、飯塚一幸、中村 平、天野尚樹、三木理史、石原 俊、水谷清佳、井濶 裕、広瀬玲子、玄 武岩	4. 発行年 2018年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 361 (石原担当部分 : pp.176-200)
3. 書名 帝国日本の移動と動員	

1. 著者名 石原 俊 監修	4. 発行年 2018年
2. 出版社 小笠原諸島返還50周年記念事業実行委員会	5. 総ページ数 152
3. 書名 小笠原諸島返還50周年記念誌：原色 小笠原の魂 The Spirit of Ogasawara Islands	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>明治学院大学 研究者情報（石原 俊・社会学部教授）  <a href="https://gyoseki.meijigakuin.ac.jp/mguhp/KgApp?kyoinId=ymdegegegy">https://gyoseki.meijigakuin.ac.jp/mguhp/KgApp?kyoinId=ymdegegegy</a>          明治学院大学社会学部 教員紹介（石原 俊・社会学部教授）  <a href="http://soc.meijigakuin.ac.jp/gakka/staff/s-ishihara.html">http://soc.meijigakuin.ac.jp/gakka/staff/s-ishihara.html</a></p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	有菌 真代  (Arizono Masayo)  (90634345)	龍谷大学・社会学部・専任講師    (34316)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	University of California Los Angeles		